人があるかも知れないが、自分はこれも亦信じ難い節があると思ふのである、何故かといへば、實錄に見える如く馬沙亦黑は火原潔と共に華夷譯語の編纂に從事したのであつたが、實錄の文によると（前出參照）、彼の關係したのは其の中でも蒙古語であつたと思はれる、しかし撒馬兒罕から明に來て當時に至る迄僅かに二年餘を經たに過ぎない人が、特に取り立てられて此の事業に當る程蒙古語に通じて居たとは受けとり難い、若し此の場合想像を回らすを許すならば、馬沙亦黑は撒馬罕兒生れの回回教の太師で、既に前代元の時に東に來て居たのが、更めて洪武年間に明に仕ふるに至つたものだと解釋したい、明初天文に關した官職に任じた有名な人は大概元の遺臣で、かの馬沙亦黑と協同して天文書を譯したといふ劉基・吳伯宗の輩は、皆元の太史院の官人であつたのであるが、なほ明史（卷三一、曆法沿革）に據ると、「洪武元年、改院（太史院）爲司天監、又置回回司天監、詔徵元太史院使張佑・回回司天太監黑的兒等十四人、尋召回回司天太監鄭阿里等十一人、至京議曆法」と見えて居る、また皇明詔令（卷二）には「除阿都剌回回司天少監誥」の一篇が載せてあるが、司天監は洪武三年に欽天監と改められたものであることから考へると、此の誥命は洪武三年以前のものなることは明かである、從つて此の阿都剌も前記の人々と同樣に、元朝に仕へて居たものが、明初その朝廷に入覲するに至つたものであらうと思ふ、自分は馬沙亦黑についても此等と同樣の經歷で、元末に撒馬兒罕から來た回教徒で、多分元朝に仕官し、蒙古語にも通ずるに至つたものが明初になつて更めて漏刻博士を手初めに仕官したものではなからうかと思ふ、「官其偕來者」と見えて居るからは、彼の外にも同時に明に仕へるに至つた人があつたことは明かであるが、これが前述の十四人、もしくは十一人の徒であつたかどうかは固より判らない、かくて恰も斑勒紇（Balkh）の人察罕が、聖武開天記を脫必赤顏から譯出したやうに、撒馬兒罕生れ